

## マ

の作品の絵本を多数発表する。民衆芸術に根ざした大胆な構図と色彩が特徴。『かますの命令』(一九五八)、『*Сказочные звери* おとぎ話の動物』(六五)、『いりえのほとり』(七〇)、『かえるの王女』(八二)など多くの絵本が出版されている。一九七五年国家賞、七六年国際アンデルセン賞を受賞。

前川千帆

(まえかわ せんぱん)

一八八九—一九六〇(明22—昭35)

(松谷さやか)

マイエロバー マリエ Marie Majerová 一八八二—一九六七 チェコスロバキアの女流作家。本名マリエ・バルトショバ(結婚後スチビーノバ)、のちトウサロバー) 社会主義リアリズム小説の草分け的存在で、新聞や雑誌の編集をするかたわら小説を書き、劇評家や教育者としても活動した。児童文学の分野にも社会主義リアリズムの手法を用い、とくに一人の女の子が弟の出産で母を亡くしながら父親を助けて成長していく姿を描いた『Robinsonka 女ロビンソン』(一九四〇)はチエコ文学における最初の本格的少女小説として名高い。

(保川亜矢子)

マーヴリナ

タチヤーナ・А Татьяна Алексеевна

Маврина 一九〇一—ソビエトの画家。本姓はレーベ

ジエワ。ロシア共和国の古都、現在のゴーリキー市に生まれる。モスクワの高等美術工芸工房絵画部で学ぶ。自然を題材にした絵画、ロシア民話やブーシキン

漫画家、画家、版画家。旧姓石田、本名重三郎。京都に生まれ、関西美術学院に学び、浅井忠らに師事。明治四〇年代に北沢栄天の「東京パック」で漫画家としてデビュー。軽妙な筆遣いで、ユーモラスな風俗漫画のほか政治漫画を描く。昭和初期「読売新聞」に連載した『あわてものの熊さん』が大ヒット。版画家としても独自の作風を示し、後年、『版画浴泉譜』(一九五四)なども出版し、帝展、日展には無鑑査であった。童画家としても活躍した。

(日高敏)

前川康男

(まえかわ やすお)

一九二一—(大10—)

児童文

学作家。東京に生まれる。一九四二年早稲田大学文学部ドイツ文学科入学して早大童話会で創作を学ぶが

一年後に学徒出陣。中国で敗戦を迎える。四六年六月ごろまで抑留生活を送る。復員後、札幌の子供の国社などで働き、四九年上京して早大童話会出身の作家たちと同人誌「びわの実」を創刊。この年より新潮社編集部で働き、六一年退職。五〇年「児童文学研究」創刊

号に書いた『原始林のあらし』で注目され、「びわの実」に発表した短編『川将軍』で第二回児童文学者協会新人賞を受賞。六三年坪田譲治主宰の『びわの実学校』の編集同人になり創刊号より『ヤン』の連載をはじめ

勇気と夢のもてる人生への励ましとなる。

一方、第一童話集、『ぼくはぼくらしく』を出版。六年長編『ヤン』を出版してサンケイ児童出版文化賞受賞。七〇年『魔神の海』(一九六九)で日本児童文学者協会賞。八一年『かわいいうな自動車の話』(八一)で野間児童芸賞を受賞。主な作品に『奇跡クラブ』(六六)、『はりせんばんクラブ』(六八)、『だんまり鬼十』(七〇)、『ふたりのにんじゅつつかい』(ゆびすいキヨン)『もぐらの写真機』『ふしぎなふろしきづつみ』(以上七四)などがある。代表作といえはまず『ヤン』ということになるが、この作家は北海道開拓者の厳しい生活を描いたデビュー作の『原始林のあらし』以来、常に社会と人間といったシリアルスなテーマを追求している。

『ヤン』は日本軍青年将校である私の目を通して中国の戦災孤児を描いたもの。戦争によって青春を奪われた戦中派作家の痛み、と同時に国家よりも大切な個人の人間性を鋭く語りかけてくれる。しかし、物語性豊かな子どもの文学としての誠実さを失わないところにこの作家の特質がある。男性的で、どこか父性の温かさを思われる子どもへの思いが、『川将軍』などの短編にみられる生き生きとした人間像となり逆境を超える

から一九四五年の揚子江のはとりを舞台に戦争で両親を失った一歳の少年ヤンとそのヤンと知り合った日本軍の青年将校である私との交流を通して戦争の悲劇をダイナミックに描く作品。日本人がみんな死んでしまってまで天皇を守るという中隊長の言葉に「私は、一面の焼け野原に、たつたひとり、ポツンと、天皇がたつてある光景をおもいうかべました」と書く作者の姿勢に國家と人間の本質を問う異色の戦争児童文学としている。(西本鶴介)

(西本鶴介)

注目された。

(西本鶴介)

前島とも 一九〇四一八六(明37—昭61) 画

(西本鶴介)

家。本姓松山。茨城県行方郡牛堀町に生まれ、女子美術学校日本画科卒業。一九三一年、復刊の『赤い鳥』

(西本鶴介)

にはじめて挿絵を描き、その後『コドモノクニ』『コドモアサヒ』などの絵雑誌で活躍。三二年松山文雄、安泰らと『新ニッポン童画会』結成。同年『コップ』弾

(西本鶴介)

圧で検挙された松山を支え出獄の年(一九三五年)結婚。戦後は主として日本画創作に向かい、奥村土牛塾

(西本鶴介)

に学び、塾展その他に出品を続いている。(箕田源一郎)

(西本鶴介)

前田 異(まえだ) 一八七九(一九六一)(明12—昭36) 小説家、翻訳家。山梨県生まれ。早稲田大学哲学科および英文科卒。一九〇四年隆文館に入社。六六年に博文館に移り、田山花袋主宰「文章世界」の編集に従事し、

(西本鶴介)

説家、翻訳家。山梨県生まれ。早稲田大学哲学科および英文科卒。一九〇四年隆文館に入社。六六年に博文館に移り、田山花袋主宰「文章世界」の編集に従事し、

(西本鶴介)

小説、翻訳、評論を誌上に発表。著書に『途上』(一九二三)、『遠望』(一三)、『鯛と黒鯛』(五九)などがある。

らの序が寄せられ、その悲歌は『但馬の啄木』と高く評価された。  
(萬屋秀雄)

翻訳ではゴンクール『陥葬』(一六)が有名で、『チエホフ集』(一一)、『キイランド集』(一四)、『兄の憂愁(ピエルとジャン)』(二二)など多数ある。児童文学関係では、一九年一二月『青い目の蟹』(『金の船』)など数作品を児童雑誌に発表。二〇年『世界少年文学名作集12』としてデ・アミーチス『クオーレ』を翻訳(岩波少年文庫は前田訳)。その他フーアーブル『科学物語』(二七)、チャールスカヤ『小公女ニイナ』(二〇)、ソログーピ『影絵』(二三)、ヴァン・ローレン『聖書物語』上下(一四、四五)など。また、『少年国史物語』の執筆(四〇年まで一冊)もある。妻は童話作家の徳永寿美子である。

(三井喜美子)

茅盾(マオ・ヂュン)  
一八九六年一月八日—一九八一年中国の作家、評論家。本名沈德鴻、字は雁冰。浙江省に生まれる。処女作『蝕』(一九三〇)以後、リアリズム作家として『子夜』(三三)、『腐蝕』(四二)など、中国文学を代表する作品を残した。児童文学の面でも早くから諸外国の作品を紹介、啓蒙的役割を果たすとともに、自らも『少年印刷工』(三六)などを著す。また、國務院文化部長などの要職を歴任、文学芸術行政の面でも指導的役割を担つた。

マカレーノ アントン・C. АНТОН Семёнович

(中島久美子)

前田純孝(まきたか)  
一八八〇年一九一一年(明治三十九年)  
歌人。翠溪と号した。兵庫県二方郡諸寄村に生まれ、御影師範を経て東京高師国漢科卒業。師範時代作歌に入り、上京後『明星』に参加。短歌のほか長詩、唱歌作詩など多方面の活動を行い、その唱歌作品は『中等教育唱歌集』(一九〇八年、山田源一郎編)その他に収められている。その後『白百合』に移り活躍。高師卒業後、大阪府立島之内高女(のち夕陽丘高女と改称)に教頭で赴任したが、肺患のため郷里に帰り貧窮の果てに歿す。『翠溪歌集』(一三)には上田敏、与謝野寛、佐佐木信綱

の序が寄せられ、その悲歌は『但馬の啄木』と高く評価された。  
(萬屋秀雄)

マカレーノ アントン・C. АНТОН Семёнович  
作家。ウクライナのハリコフ近郊で教育学上未開拓の非行少年の大量的再教育の実験を成功させた。その経験を通じて、どのように孤立された人間が結び合い効働し、友情や人間にに対する信頼が生まれるかを作品として描いた。主要な作品は『三〇年の行進』(三三)、『教育叙事詩』(一九三五)、『塔の上の旗』(三八)など。そのほか教育論には『子どもの教育について』『親のための本』(三七)、『児童文学論』(三八)などがある。文学作品の特色は、描写が生き生きとし、リアルで、明快なユーモアに富み、登場人物の性格が描き分けられ、深い心理解剖まで至っている点である。  
(福井研介)

榎本楠郎

（まきもと  
くすろう）

一八九八—一九五六年（明治三十一年—昭和三十一年）

童話作家、評論家、童謡詩人。本名楠男。岡山県吉備郡福富村に生まれる。早稲田大学中退。一九二二年、郷里にあつて詩集『処女林のひびき』、編著『吉備郡民謡集』を刊。そのころから、社会主義思想に共鳴して上京。二七年「文芸戦線」八月号に日本で最初のプロレタリア童謡『メーデーごっこ』を発表。翌二八年一〇月に結成された新興童話作家連盟の幹事として活躍。機関誌『童話運動』創刊号に評論『児童文学の階級性』を発表。当時、支配的であつた超階級的な童心主義の児童觀を否定し階級的児童觀に立つ児童文学を主張した。同連盟の解散後は、マルキシズム派の前衛芸術家連盟（機関誌『前衛』）、全日本無産者芸術家連盟（機関誌『戦旗』）に所属、それぞれの機関誌に童話、童謡を発表した。『戦旗』（一九二八・一二）に発表した『文化村を襲つた子供』は昭和初期のプロレタリア児童文学の代表作。「前衛」の「コドモノページ」には、毎号、『手まり唄』『なわとび唄』などの伝承童謡形式の童謡を発表。プロレタリア童謡の開拓にも努力した。一九三〇年には、『プロレタリア児童文学の諸問題』『プロレタリア童謡講話』の二冊を刊行。プロレタリア児童文学運動の先頭に立つた。その後、中日戦争がはじまり軍国主義の進行する児童文学の冬の季節には、『新児童文学理論』（三二六）の中で生活主義童話理論を開拓し

児童文学の進むべき方向を示した意義は大きい。評論のほかに、作品活動の領域は広い。創作の代表作は、『仔猫の裁判』（三五）、『フタツノランドセル』（三六）、『原つばの子供会』（三七）、『猫と誕生日』（三九）、『月夜の滑台』（三八）、『月夜の蜜柑山』（四三）、『花電車』（四八）で、いずれも市民生活に題材を取つた生活童話系列の短編童話である。童謡集に、前出のほか川崎大治、岡一太らとの共著『小さい同志』（三二）、翻訳にソビエトのパンテレーエフ作『金時計』（三三）があるほか、伝説、民話の再話も多い。晩年は病床によることが多く再起が期待されながら十分に活動ができないまま三一年九月一五日死去。童話作家の榎本ナナ子は一人娘。

『新児童文学理論』（しんじどうぶん）評論集。一九三三年夏から三六年上半期までに雑誌に発表した評論を収録。児童文学の本質論、現状批判、童謡論、作品評の四部構成。時代の影響が初期の階級闘争のための児童文学の主張を和らげ、「児童の日常生活の中から、正しい集団的、自主的、創造的生活を導き出しそれをより合理的な社会生活へと、彼ら自身によつて高めさせて行くことである」として児童文学の目標を子どもの人間形成におき、その後の『生活童話』（リアリズム童話）の理論的よりどころとなつた。

【参考文献】『国分一太郎・中野重治・榎本楠郎集』（一九六二・少

マーク ジャン Jan Mark 一九四三～ イギリスの児童文学作家。友情をテーマにした処女作『サンダーライトニング』(一九七六)でカーネギー賞を受賞。

『秋の庭』(七七)や、短編物語集『Nothing to be afraid of なんにもこわくない』(八〇)など、作品はいずれも簡単な文体で登場人物の感情の動きをみると描き出している。また新しい手法を用いたSFも手がけ、その代表として未来を舞台に人間社会を風刺した『九つの惑星—エニアド』(七八)があげられる。

(早川敦子)

マクダーモット ジェラルド Gerald McDermott 一九四一～ アメリカの絵本作家。本業は映画製作者であるが、神話や民話の世界をグラフィックな絵で表現し、注目されている。アフリカ民話『アナンシと6ぴきの息子』(一九七二)は、コールデコット次点賞となり、エプロインディアンの伝説『太陽へ飛ぶ矢』(七四)で同本賞を得た。エジプト神話『オシリスのたび』(七六)の中では、象形文字を絵本化している。

(田中瑞枝)

マーク・トウェイン → トウェイン、マーク

マクドナルド ジョージ George MacDonald 一八

二四～一九〇五 イギリスの詩人、小説家、児童文学作家。スコットランドのアバディーン州ハントレーの機

織り職人の六人兄弟の次男に生まれ、八歳で母を失う。アバディーン大学を出て、ハイベリー神学校の研究生となり、一八五〇年西サセックスのアランデル教会牧師となる。翌年結婚、一人の子どもを抱え、貧困と病に苦ししながらマンチエスターで説教や講話で生計を立てるが、心は文学へ傾いていく。五五年、詩劇『Within and Without 内と外』がバイロン夫人に賞賛され、援助を得る。五七年アダルト・ファンタジー『ファンタステス・フェアリー・ロマンス』の成功で、ペッドフォード・カレッジで文学を講じることとなり、また、ロンドンの家にルイス・キャロルが『ふしきの国のアリス』を携えてここを訪ね親密な交友がはじまる。六七年の短編集『妖精のおつき合い』には、魔女の呪いで重力を失った『軽いお姫さま』や『巨人の心臓』『影たち』『おめあてちがい』など伝承物語の超自然の生き物たちとの交渉から生じる幻想的な世界でのき事が、奇抜な着想とユーモアの筆致で描かれている。この線上の代表作『北風のうしろの国』(一八七二)は、雑誌「このものの良いお話」に一年間連載後、A・ヒューズの挿絵つきで刊行された。彼の好んだ主題『お姫さま』ものには前述のほか『お姫さまとゴブリンの物語』(七二)、『カーディとお姫さまの物語』(七七)があり、さらに『ダブルストーリー』(七五)の中に『きえてしまった王女』と改題される。登場するゴブリンなどの

妖精たちは、フランス系妖精伝承をもとに彼自身の想像からつくり出された特色ある超自然の生き物で、C・S・ルイスはいみじくもマクドナルドを「神話を創る人」と呼んだ。最晩年の『リリス』はアダルト・ファンタジーで、アダムの最初の妻で幼児に死をもたらす悪の女性が、伝説を踏まえ奔放な想像力を駆使して描かれている。一九〇五年長い病ののち他界するが、晩年を過ごしたイタリアのボルティゲエラに妻とともに埋葬される。

〔北風のうしろの国〕<sup>きたかぜのうしろのくに</sup> *At the Back of the North Wind* 童話。一八七一年。馬小屋の干草置場で寝ていた少年ダイアモンドは、突然現れた美しい女性姿の北風の背中に乗り、「北風のうしろの国」へと旅していく。ダイアモンドと北風の不思議な友情、北風の体を抜けた静かな平和な場所と対照的なスマラム街の厳しい現実でのでき事が繰り広げられる。さまざまな体験を通して、賢く成長したダイアモンドが日常生活の次元に戻った時待っている「死」は、永遠なものへの旅立ちを意味している。崇高な愛と信頼が人生観の根本であるという理念を、子どもの目でつかむよう描かれている。ヴィクトリア朝の教訓的要素があるにせよ、夢を枠組みとした一九世紀ファンタジーの傑作。

(井村君江)

六一 挿絵画家、デザイナー。イギリスに生まれ、アメリカの美術学校で学ぶ。『カーティス』最も美しい大聖堂のできるまで(一九七三)は、ベン画をふんだんに用いて、建設の過程を解説したもので、コールデコット次賞を受けた。『都市一ローマ人はどのように都市をつくったか』(七四)のほか、ピラミッド、都市の地下、古城を解説した絵本などがある。  
(田中瑞枝)

マザーゲース *Mother Goose* 英語圏諸国に共通に広く伝承されているわらべ唄を、一般にマザーゲースあるいはマザーゲースの唄と愛称している。この愛称の起源は、一八世紀前半にイギリスでフランスのペローの有名な童話集がはじめて英訳された時、そのサブタイトルも原語の直訳で「マザーゲースの話」とさられたが、これにヒントを得て一八世紀半ば過ぎ、児童図書出版の先駆者ニューベリーが『Mother Goose's Melody』マザーゲースのメロディといふタイトルのわらべ唄集を刊行して大人気を博し、以来英語のわらべ唄にマザーゲースの唄という呼称が愛用されるようになつた。英米を比較してみるとアメリカの方がマザーゲースという呼称をより愛用しているようであるが、現代イギリスの代表的イラストレーターのブリッジズの、ケイト・グリーナウエー賞受賞の『Mother Goose Treasury』マザーゲース・トレジャリー』のタイトルにみるようにイギリスでもよく愛用されている。

マコーレー デイビッド David Macaulay 一九四

マザーグースの唄の魅力はなんといっても、その口調のよさにある。その快適な響きは一度耳にしたら決して忘れられない。とくに唄の（活字で表した時の行の終わりの音を一定のルールで共通にしていく）ライム（脚韻）や、同音の繰り返しであるアリタレー・ション（頭韻）や、歯擦音や破裂音の有効な使用など、聞く者、唱える者に著しい生理的快感を与える。そして、舌と耳になじみやすい響きのよさが常に優先するので、意味（センス）は一の次にされ、その結果、マザーグースの唄にはナンセンスの唄が非常に多い。また、そのナンセンスに対するかのように自明の事実を愚直に述べた非ナセンスの唄も豊富である。マザーグースの唄にはバラッド（民謡）から入った比較的長い物語唄が多いが、ごく短い唄にも起承転結のはつきりした物語唄が豊富で、それらに登場するキャラクターがまたきわめて多彩で、そういう人物像からもマザーグースの唄は広く親しまれている。——→英語圏の童唄

(吉田新二)

(吉田新二)

**真下飛泉**（ましもひづる）一八七八（明治11）大15 唱歌作詞家。本名滝吉。京都府の生まれ、京都師範を卒業、同校附属小学校訓導。のち小学校長、中学校教員。

教育界を退いたのち京都市議。少年時代投書家として知られたが、教職についてから伊良子清白と往来、また「文庫」、「明星」に短歌を投稿している。軍歌『戦友』は『学校及家庭用言文一致叙事唱歌』一二編中の

第三編で、曲は『善和氣（一般にわきと訓む）』。歴後西川百合子により『飛泉抄』が出版された。（佐藤光二）

**魔女**（まじょ）ウイッチ。女魔法使い。一般に容貌は老婆のようやせて醜く、赤いかぎ鼻長い爪、黒いマント姿。魔法の杖を使い、悪魔から得た魔術や呪法で嵐や風を呼び、人間や動物の姿を変えたり、病や死を与え、自らも変身するが主として猫、ひき蛙、三本足の兎となる。予言の能力をもち、薬草や蛇・まむし・とかげなどで呪金を煮て毒をつくる。魔女の種類は、(1)へ黒い魔女・人間に致命的な悪をもたらす。(2)へ灰色の魔女・人間に危害を加える。(3)へ白い魔女・害が少なく人間を助ける。薬草の知識、医術や占星術に長じた魔女もここに属するが、中世の魔女裁判で多くの老女が魔女として殺された。五月一日の前夜ワルブルギスに、ブッテンブローカなどの山頂で催される饗宴に、ほうきの柄やひしやく、雄山羊、豚などに乗つて空を飛んで出かけ悪魔と踊るといわれる。昔話の『白雪姫』や『いばら姫』の意地悪な繼母である女王が魔女に変わるが、最後には滅ぼされる惡の存在の象徴として現代の物語でも活躍している。（井村君江）

**真杉静枝**（まさきしづえ）一九〇一（明34）昭30 作家。

福井県生まれ。台湾の女学校中退後、若くして結婚したが、心にかなわず離婚し、作家になつた。一九二七年处女作『小魚の心』で文壇にデビュー、女心の機微

を巧みに描いた。戦後は鏡書房を設立したが、作家としては振るわず、少女小説の多作が目だつ。『三つの誓』（一九四八）、『夜会服の乙女』（四九）など、数奇な運命にもてあそばれる少女の恋物語が多い。

（江刺昭子）

**益田勝実** まつだ 一九二三（大12）～ 国文学者。

法政大学教授。山口県生まれ、一九五一年東京大学国文学科卒業。専攻は日本古代文学。古事記、万葉集、源氏物語、説話文学などに関する優れた業績を世に問い、神話や民話に独自の分析を示した。文学教育や児童文学、さらに民俗学に対しても造詣が深く、柳田国男や南方熊楠に関する提言にも鋭いものがある。著書に『火山列島の思想』（一九六八）、『秘儀の島』（七六）などがある。

（吉沢和夫）

**増田抱村**

ますだ  
ほくそん

**増村王子** ますむら 一九一三（大2）～ 読書運動家。秋田県生まれ。秋田女子師範卒業後教職につく。一九四八年港区水川小学赴任。学校図書館・図書館教育・読書指導の実践と研究。五九年都立教育研究所有三青少年文庫勤務。学級貸出しの竹の子文庫・学級招待の読書指導を実施、読書教育の理論化を行う。六七年日本子ども本研究会創設に参加。七四年会長となる。著書『タッタカ先生と子どもたち』（一九八三）、『本とわたしと子どもたち』（八六）など。

マチーセン エゴン Egon Mathiesen 一九〇七～七

六 デンマークの絵本作家。独修で画家となり抽象画家として活躍するとともに、数々の創作絵本を手がけ、デンマーク政府の絵本賞を受けた。児童演劇に関する業績では王室アカデミーからも賞を贈られる。絵本の代表作に『Aben Oswald さるのオズワルド』（一九四七）と邦訳もある『あおい日のこねこ』（四九）、遺作となつた『ひとりぼっちのこねずみ』（八六）などがある。機知に富んだ物語に闊達な筆致で動きのある挿絵を添えた作品は子どもに親しまれる。

（松居 直）

**松井英子** まつい 一九一五～七五（大4～昭50）児童文学作家。本名小池秀子。三重県鈴鹿市に生まれる。

小学校時代は、父親の仕事上転校を繰り返す。県立飯南高女卒業後上京。帝国医師薬専門学校中退。その後井野川潔、早船ちよに師事。本格的に児童文学の世界

に入る。『ひとりぼっち』（一九六五）、『いちばん美しく』（六六）、ほかに『若いこだま』（七四）、『ミキの赤い手ぶくろ』（七五）などがある。

（中島信子）

**松居松翁** しまついおう 一八七〇～一九三三（明3～昭8）劇作家、演出家。本名真玄。松葉と号したが一九二四年に改号。宮城県生まれ。国民英学会を卒業、坪内逍遙に師事。史劇『悪源太』（一八九九）が明治座で上演されて反響を呼んだ。○六年渡欧、近代劇と演出を学ぶ。帰国後、明治座、文芸協会、公衆劇団で演出に当たり、松竹顧問となる。戯曲『茶を作る家』（一九二三）、『神主の娘』（一五）のほか、童話劇『子供の極楽』（一八）『赤い鳥』や評論『芝居と子供』（一七「演芸画報」）がある。

（藤木宏幸）

**松居直** まつじ 一九二六～（大15～）児童文学作家、評論家、絵本制作者。京都に生まれ、同志社大学法学部卒業。一九五一年、福音館書店に入社し、五六（昭31）、月刊絵本『ことものとも』を創刊、編集長として、戦後日本における草創期の創作絵本の出版に力を注ぐ。多くの絵本作家、画家を育てた。赤羽未吉、長新太、瀬川康男、中川李枝子など、いずれも編集者としての松居直に見いだされ、育てられたといつてよい。自らも絵本の創作、再話を試み、その代表作に『やまのきかんしゃ』（一九五八、太田忠絶）、『びかくんめをまわす』（六六、長新太絵）、『だいくとおにろく』（六七

赤羽未吉絵）などがある。また、理論、批評の面でも戦後日本の児童文学界（とくに絵本の分野）にほとんど革命的なといえる一石を投じた。石井桃子らとの共著『子どもと文学』（六〇）がそれである。個人著には『絵本とは何か』（六六）、『絵本を見る眼』（七八）など。現在、福音館書店会長。BIB国際委員など国際的な要職も兼ねている。

（小西正保）  
**松岡享子** きょうおか 一九三五～（昭10～）児童文学作家、評論家。神戸に生まれる。神戸女学院大学英文科、慶應大学図書館学科卒業後、アメリカのウエスタンシシガン大学大学院図書館学科修士過程を経て、ボルチモア市立イーノック・プラット公共図書館の児童図書館員を一年間務めて帰国。大阪市立中央図書館小・中学生室に勤務した後一九六七年より自宅で家庭文庫松の実文庫を開き、同じく家庭文庫をもつ石井桃子のかつら文庫、土屋滋子の土屋児童文庫らと七四年に財團法人東京子ども図書館を設立、その理事長に就任、児童図書とその奉仕活動の向上に尽力する。また並行して、創作に『くしやみくしやみ天のめぐみ』（一九六八）、『とこちゃんはどこ』（七〇）、『おふろだいすき』（八二）ほか、翻訳に『パディントン』シリーズ（六七）、『ヘンリーケン』シリーズ（六八）ほか、評論に『サンタクロースの部屋』（七八）、『昔話絵本を考える』（八五）、『えほんのせかいことものせかい』（八七）、な

どで旺盛な活動を行う。

(吉田新一)

松尾弥太郎 （まつお やたろう） 一九一一（明44） 読書運動家。東京生まれ。少年時代日比谷図書館に通う。青山師範卒業。一九五〇年全国学校図書館協議会（SLA）創設、事務局長となる。東横女子短大などの講師として司書教諭養成。七三年SLA事務局長退任、学校図書館ブックセンター（SLBC）理事長となる。主な著書『君たちはどう読んでいるか』（一九七〇）、『本を読む子・読まない子』（七六）、『読書感想文の書き方』（七八）そのほかがある。

マッキー デイビッド David McKee 一九四三—

イギリスの絵本作家。児童向けテレビ番組の制作にも当たっている。『ぞうのエルマー』（一九六八）、『123456789のベン』（七〇）、『るすばんをしたオルリック』（七二）など、笑いを誘うコミックな絵を得意とする。『じろりじろり』（七八）は、象の表情を人間に擬しながら、厳しい現実世界への洞察をユーモラスに描いている。

（田中瑞枝）

マックロスキー ロバート Robert McCloskey 一

九一四一 アメリカのイラストレーター、児童文学作家。オハイオ州ハミルトンで生まれた。ボストンのウェバー・ジョージ芸術学校およびニューヨークのナルショナル・アカデミーで絵画を学ぶ。子ども時代の経験や思い出をもとに絵本の処女作『Lentil』（レンティ）

ル』（一九四〇）を出版、第二作『かもさんおとおり』（一九四一）でコールデコット賞受賞。この作品は、ボストンの公園で実際に見たかの親子をモデルにしたほほえましい絵本である。続いて現代的ほら話ともいべきユーモラスな長編童話『ゆかいなホーマーくん』（四二）を発表。その後マックロスキー一家は、メイン州のペノブスコット湾の小島に居を移した。美しい自然のたたずまいは、マックロスキーにとつて尽きざるインスピレーションの源となり、島の暮らしの中から『サリーのこけももつみ』（四八）、『海への朝』（五一）、そして再度のコールデコット賞をもたらした『すばらしいとき』（五七）、『沖釣り漁師のパート・ダウジーセン』（六三）が生まれた。マックロスキーの作品は、良き時代のアメリカのおおらかさ、明るさを表象するものとして高く評価されている。現在、夏はメインの島、冬は南のバージン諸島で生活しながら、映画、人形劇など多彩な創作活動を続けている。

（渡辺茂男）

松阪忠則 （まつさか ただのり） 一九〇二一八六 明35（昭61） 国語学者、児童文学作家。秋田出身。国語問題や児童文学に強い関心を寄せ、「カナモジカイ」「青少年文化の会」の理事長、産業能率大学教授などを歴任した。初期の国語審議会委員として、漢字削減表記の能率化に積極的な提言をした。子どもの作文にも関心をもち、作文コンクールの選者をも務めた。児童文学作品の代表作

に、「銀河」に発表した『ダイ焼き』『心のふえ』があり短編集『朝雲のように』(一九四八)、『山の王者』(五〇)がある。生活の貧しさの中の子どもたちを励ます主題の作品が多い。

(倉沢栄吉)

**松下井知夫** いちお (まつした) 一九一〇 (明43) 漫画家。本名市郎。東京都に生まれる。北沢樂天の門下生で、一九三八年には大田耕士らと漫画誌「カリカレ」を創刊する。しかしこれが弾圧され、時局もののコマ漫画に移る。四〇年から「アサヒグラフ」に『推進親爺』を連載し、四四年からは『週刊少国民』に『ナマリン王國物語』を連載した。戦後には『新バグダッドの盜賊』などのストーリー性の強い作品を発表し続けた。単行本に『少国民漫画八太郎將軍ハチハチ島の巻』(一九四三)、『推進親爺・突貫編』(四二)『テンテンのてつちゃん』(五一)、『はなまるダンスケ』(五五)など。

(石子 順)

**松田司郎** しろう 一九四一 (昭17) 評論家、児童文学作家。大阪に生まれるが幼少時を島根県の山村で過ごし、高津高校から同志社大学英文科卒。この間詩や民俗学に関心を抱き宮沢賢治などの影響から創作をはじめる。出版社に勤務のかたわら一九六八年に同人誌「101ばんめの星」を創刊、創作民話と評論に力を注ぐ。創作に『ウネのてんぐ笑い』(一九七五)他。評論に『現代児童文学の世界』(八二)などがある。

(藤本芳則)

**松田瓊子**

(まつこ)

**松田解子**

(まづこ)

一九〇五 (明38)

小説家。

秋田県仙北郡に生まれ、秋田女子師範一部を卒業。教職二年ののち上京。一九三〇年ごろより日本プロレタリア作家同盟に加わって文学活動を開始、『女性苦』(一九三三)をはじめ一貫して労働者・農民の女性像を追求している。『おりん口伝』(六八)で第一回多喜二・百合子賞を受賞。『おりん母子伝』(七四)では、下女部屋に

成長して社会に目覚める少女を描出。戦前期より我が子を自由教育校として知られる池袋児童の村小学校に通わせたり、感想評論集『子供とともに』(三八)を出したりなど、児童問題への関心をもち続けている。

(大岡秀明)

松谷みよ子 みよこ 一九二六・(大正十五年) 児童文学作家。本名美代子。東京神田生まれ。父与二郎(日本大衆党代議士)はみよ子一一歳の時死去。一九四一年東洋高女卒業。四四年海軍水路部に徴用。このころから童話を書きはじめる。四五年五月戦災を受け長野県下高井村に疎開。四七年野尻湖に疎開中の坪田譲治を友人の紹介で訪れ、教えを乞うために作品を書きためたノートを預ける。四八年単身東京へ帰り、横浜銀行労組書記となる。坪田の推薦で『貝になつた子供の話』が雑誌「童話教室」(一九四八・八)に掲載され、その後『スカイの金メダル』などを含む短編集『貝になつた子供』(五二)としてあかね書房から出版、第一回日本児童文学者協会新人賞を受賞した。五五年民話研究家瀬川拓男と結婚、人形劇団太郎座を創立したころから社会的な視野が広がり、瀬川とともに採訪した信州地方の小泉小太郎伝説を素材にして創作した『龍の子太郎』によつて、それまでになかった新しい独自の文学をつくりあげ、第一回講談社新人賞に入選(六〇)、単行本となり、六一年サンケイ児童出版文化賞、六二年国際ア

ンデルセン賞を受賞。民話を素材にした創作童話に入れる一方、私小説的な幼年童話『ちいさいモモちゃん』(六四)を著して幼年童話にも新風を吹き込んだ。働くママと成長していく幼児の日常生活が弾むような文体で明るく描かれ、多くの共感を呼び、第二回野間児童芸賞、NHK児童文学奨励賞を受賞(六五)。その後も『モモちゃんとブー』(七〇)、『モモちゃんとアカネちゃん』(七四)、『ちいさいアカネちゃん』(八〇)、『アカネちゃんとお客様のパパ』(八三)と書き進められ、ことに、『ちいさいアカネちゃん』では幼年童話がタブーとしてきた両親の離婚をメルヘン的に描き、幼年童話に新たな地平を開いて、赤い鳥文学賞を受賞。そのほか、『赤ちゃん絵本』、『おばけちゃん』シリーズ、『ふうちやんえほん』など、幼児や幼年の本でも新しい開拓を試み、また『ふたりのイーダ』(六九)、『死の國からのバトン』(七六)、『私のアンネフランク』(七九)日本児童文学者協会賞などの告発の文学や『まちんと』(八三)、『おいでおいで』(八四)など、戦争を知らない世代に向けての戦争児童文学に力を注ぎ、さらに最近は『現代民話考』全五巻(八五~八六)など現代民話の採録に新たな意欲を燃やしている。「びわの実学校」同人、「龍の子太郎」(たつ子)創作童話。一九六〇年。信州の小泉小太郎伝説を中心に、その地方に伝わるいろいろな民話を取り入れつくりあげた童話で、松谷は「祖先

と私の合作」といつている。わらべ唄などを織り込んだ語りの文体も、あるいは祖先との合作というべきかもしれないが、おおどかな響きと美しいリズムが内在

していく、内容・表現ともに新鮮な創作として、その後の日本児童文学界に大きな影響を与えた。(西田良子)

松田道雄まつだ みちお 一九〇八(明41) 小児科医、評論家。茨城県の医家に生まれ、京都に移住。京都帝国大学医学部を卒業、京都市にて小児科医院を開業しつつ、医療問題、児童問題、政治社会問題など広汎にわたる評論活動を展開。『日本知識人の思想』(一九六五)『革命と市民的自由』(七〇)など多数の著書がある。児童問題にかかる業績として、管理的な社会における育児・教育を批判した『私は赤ちゃん』(六〇)や『自由を子どもに』(七三)、児童向きの人生論に『君たちの天分を生かそう』(六二)など。

(中村悦子)

マツツイー二 ジュゼッペ Giuseppe Mazzini 一八〇五~七一 イタリアの革命家、著述家。イタリア統一運動の実践のために生涯のほとんどを亡命者として国外で過ごしたが、その間『Dell'amor patrio di Dante Mazzini』の愛国心について』(一八一六)、『I dolori dell'uomo 人間の義務』(六一)など多くの著書を世に出し、統一と独立の高い理想に貫かれた、理論的精神的指導者として多くの人々に影響を与えた。子どもたちにも感銘を与えたことは『クオーレ』からもうかがい知る

ことができる。

松永健哉

一九〇七(明40) 教育家、

(剣持弘子)

小説家。韓国京城に生まれ、長崎県脇岬で育つ。長崎師範、高知高校を経て、東京帝国大学文学部教育学科に学ぶ。東京帝大セツルメント活動から校外教育の分野を拓き、同セツルメント発行『児童問題研究』創刊(一九三三)にも参画し、一九三四年新年号には当時話題のソ連映画を脚色した紙芝居『人生案内』を付録にして注目される。東大卒業後も校外教育の実践と紙芝居の教育的利用を提唱し、『子供の自治生活』(三六)、『校外教育十講』(三七)刊。三八年に日本教育紙芝居協会を設立したが、同年内には南支派遣軍報道部員として大陸宣撫に赴く。帰国後に『教育紙芝居講座』(四〇)刊。戦後は光塩女子短大教授、六〇年ごろから児童生徒の長欠問題とも取り組み、代表者として運営に当たった黄十字学園は第一八回読売教育賞を受賞。小説『二重潮』(六五)、『かげろう』(六六)、児童読み物『いわしの村』(五八)などの作品もある。

(上地ちづ子)

松葉重庸まつば しげづね 一九〇五(明38) 児童文 化活動家、人形劇人。東京に生まれ、東京帝国大学文学部社会学科卒業。大学在学中から東京帝大セツルメント児童部の活動に参加し、菅忠道、松永健哉らを知

戦後、人形劇の普及に活躍した。絵本『オサルノエウチエン』(四一)、『村の人形芝居』(四七)、『児童文化概論』(五〇)、『幼児の人形芝居』(五六)など、三〇冊を超える人形劇と児童文化に関する著書がある。

(富田博之)

**松原至大** 一八九三—一九七一(明26—昭46)

童謡詩人、少女小説作家、翻訳家。千葉県生まれ。筆名村山至大。早稲田大学英文科卒業後、一九一八年

東京日日新聞社に入社、「小学生新聞」の編集長を務めた。雑誌「良友」「少女世界」に童謡、少女小説を発表し、二一年『五つの路』を東京日日新聞に連載。一二二

年から「少女画報」に少女小説を発表し続け、二三年『鳩のお家』を出版、少女小説作家として注目された。また「コドモノクニ」「コドモアサヒ」などに童謡を発表し、童謡詩人としても活躍した。童謡集『赤い風船』(一九三五)のほか、『世界童謡選集』(一四)、『マザ・グウス子供の唄』(二五)などの著書もある。翻訳家として『幼き日のこと』(四〇、抄訳)などの翻訳がある。

(畠中圭二)

**松美佐雄** 一八七九—一九六二(明12—昭37) 口演童話家。本名戸塚峻。群馬県に生まれる。高等小学卒業後、代用教員や工員などをしながら仏語を独習

し、江見水蔭に師事して童話を書く。時事新報社の「少女」の編集者を経て、一九一八年から口演童話家となる。二四年に日本童話連盟を設立、その主事となり、機関誌『話方研究』(一九二五—四一)を出して口演童話の普及に努めた。著書に童話集『芦笛の唄』(二三)、『教室童話学・初篇』(二七)、『愛らしき幼児お話集』(二九)などがある。

**松村武雄** 一八八三—一九六九(明16—昭44)

神話学者、童話研究家。文学博士。熊本県に生まれ、一九一〇年東京帝国大学文学大学英文科卒業。二二二年より旧制浦和高等学校教授と東京帝大宗教学科講師を兼任した。文献学、歴史学、民俗学、考古学など各種の学問の成果を総合する学風をもって、同郷の先駆高木敏雄と並ぶ神話学者となる。二九年ごろより神話学に関する著作を次々発表。『神話学原論』上・下(一九四〇、四一)は戦後最初の学士院恩賜賞を受ける。四二年に刊行した『古代希臘における宗教的葛藤』は欧米でも注目された。敗戦による精神的挫折ののち、病苦をおして大著『日本神話の研究』全四巻を完成する。また、児童および児童文学に関心が深く、関連する労作として『世界童話大系』全二三巻、『神話伝説大系』全八巻の中心的編集にあたり執筆・解題もした。いまだに基本的文献として活用されている。『標準お伽文庫』全五巻(森鷗外・松村武雄・鈴木三重吉・馬渕冷佑共

著)は、伝承説話の児童向き標準語訳として信頼度の高い読み物として知られている。『童話教育新論』(一九二九)は、前著『童話及び児童の研究』(二二)、『児童教育と児童文芸』(二三)に続く童話教育論で、歐州留学の経験に従事し精神分析学を取り入れ、その視点から日本の童話教育の在り方を問い合わせた大著。日本の文芸教育・芸術教育思潮を背景に、童話教育の重要性を認識させる役割を果たした。

(伊達安子・滑川道夫)

**松本かつぢ** (かつもと)  
一九〇四—(明37)—抒情画

家、少女漫画家、童画家。本名勝治。神戸市に生まれ、\*のち東京に移る。川端画学校卒。中学時代から博文館の雑誌に挿絵などを発表。二七歳の時抒情画家として独立。アールヌーボーやディズニーなどを吸収しながら明るい抒情画に独自の境地を拓く。のち少女漫画にも進出。代表作『くるくるクルミちゃん』は三五年間諸誌に連載。戦後は童画にも活躍。また戦前には文具のデザインに、戦後は幼児用品に多くの作品がある。

(遠藤寛子)

**松本苦味** (まつもと)  
一八九〇—歿年不詳(明23—?)翻

訳家、戯曲作家。本名圭亮。東京京橋の生まれ。国民英学舎、東京外国语学校露語専修科卒業。はじめ戯曲作家として活動したが、しだいに翻訳中心となり、児童文学では『おとぎの世界』(一九一九・四 創刊)に『金の山』(二二・一)、『いたづら鬼』(二三・七)などソビエ

ト・北欧などの昔話、名作を多数翻訳した。関東大震災後消息不明といわれている。

(岡田純也)

**松本恵子** (まつもと)  
一八九一—一九七六(明24—昭51)

英米文学翻訳家。函館生まれ。一九一六年青山女学院英文専門科卒。旧姓伊藤。夫、松本泰との共訳『ヂッケンス物語集』(一九三七)以来、共訳、単訳が多数ある。五〇年代盛んであった抄訳を主とする名作全集で英米の児童書の翻訳家として活躍した(『アンクルトム物語』『紅はごべ』など)。主な単訳書として、オルコット『四人姉妹』上・下(三九)、\*ミルン『小熊のプー公』『ブー横丁の家』(四一、四二)、ウェブスター『あしながをちさん』(五四)、クリスティ『アクロイド殺人事件』(五八)、セレディ『歌う木』(七一)などがある。ほかに、『ヘレン・ケラー——三重苦の聖女』(五三)や随筆集『猫』(六二)などがある。

(三宅興子)

**松本孝次郎** (まつじろう)  
一八七〇—一九三二(明3—昭7)

心理学者。東京神田に生まれる。東京大学哲学科卒。東京高師教授。高島平三郎や塚原政次らと、月刊誌『児童研究』を創刊(一八九八)。海外の思潮を輸入し、我が國児童学の建設に尽力。主著『児童研究』(一九〇一)中の『児童文学に関する研究』は、日本の児童文学研究の最初の論考。次著『実際的児童学』(〇一)では、童話や玩具に論及。なお、『児童研究』誌(〇二・八)にも『幼稚園に於ける童話に就て』を発表。ほかに専門

## 著書数冊。

松本利昭 まつもと としあき 一九二四（大13）詩人、児童詩研究家、新聞社社長。兵庫県高砂市に生まれる。

（弥吉音二）

戦後、少年写真新聞社を大阪で創業。一九六〇年五月在來の児童生活詩の非詩性を指摘し、新しい児童詩（主体的児童詩）を提倡開発した。批判もあるが史的意義は高い。その月刊誌は「詩の手帳」、「児童詩教育」、「子どもの詩」、「ぱえむ」と改名しながら二五年間、三〇

〇号に及んだ。その著は『あたらしい児童詩をもとめて』（六二）、『こどもにボエムをつかませよう』（六七）、『児童詩の未来像』（七三）、『主体的児童詩教育の理論と方法』（七八）など多数。

（弥吉音二）

松本楓湖 まつもと 一八四〇（一九二三（天保11）大12）

日本画家。本名敬忠。常陸国河内郡に生まれ、東京で歿。一八五三年、江戸に出て、佐竹永海、菊池容齋に学び、勤皇画家として知られ、九八年、日本美術院の創設に参加、文展開設（一九〇七）の当初から審査員にあげられ、一九一九年、帝国美術院会員になる。歴史画に長じ、代表作「蒙古襲来及碧蹄館」（一八九四）、「静女舞」（一九〇七）。門下に今村紫紅、速水御舟、小茂田青樹などがいる。

（匠 秀夫）

松本楓湖 まつもと 一八四〇（一九二三（天保11）大12）

日本画家。本名敬忠。常陸国河内郡に生まれ、東京で歿。一八五三年、江戸に出て、佐竹永海、菊池容齋に学び、勤皇画家として知られ、九八年、日本美術院の創設に参加、文展開設（一九〇七）の当初から審査員にあげられ、一九一九年、帝国美術院会員になる。歴史画に長じ、代表作「蒙古襲来及碧蹄館」（一八九四）、「静女舞」（一九〇七）。門下に今村紫紅、速水御舟、小茂田青樹などがいる。

（匠 秀夫）

松本亦太郎 まつもと 一八六五（一九四三（慶應1）昭和18）心理学者。群馬県赤城山麓に生まれ、東京帝国大学哲学科卒。アメリカやドイツで心理学を学んだ後、

京都帝国大学教授になり、東京帝国大学教授に転じる。我が国の心理学研究を欧米の水準に高めるために各種の努力を重ね、実証的応用を考え、軍事、産業、教育などに心理学の活用を図った。その著には『実験心理学十講』（一九一四）、『絵画鑑賞の心理』（二六）、『諸民族の芸術』（三〇）など幅広く、高島平三郎とともに、日本児童学会の設立に努力した。

（平井信義）

松本零士 まつもと 一九三八（昭13）漫画家。

本名晟。福岡県久留米市に生まれ、一九五七年福岡県立小倉南高校卒業。上京後「少女」「少女クラブ」「ひとみ」などに少女漫画を描いたあと少年漫画に転じ、「男おいどん」（一九七一）で名を売る。「戦場まんがシリーズ」（七三）、「宇宙戦艦ヤマト」（七四）、「キヤブテンハーロック」（七七）、「銀河鉄道999」（七七）など、大空、宇宙を舞台に、男の生のロマンを熱っぽく描き続けている。

（竹内オサム）

松山思水 しまやま 一八八九頃（一九六〇（明22頃）昭和35）児童読み物作家、編集者。本名二郎。和歌山生まれ。一九一二年早稲田大学英文学科卒業後、同級の濱沢青花、原掬水とともに実業之日本社に入社。「日本少年」の編集に従事し、主筆の有本芳水とともに同誌の最盛期を築いた。一九年、創刊された「小学男生」の主筆となつたが、二年再び「日本少年」に戻り主

筆として活躍した。当時の編集者は、自誌に作品を執筆し、作家としても読者に絶大の人気があつたが、思水も創作、翻案、伝記などに健筆を振るつた。とくに当時の少年感情を捉えた滑稽小説は、新しいジャンルの読み物として大正期の少年たちを魅了した。著書『笑の爆弾』『ピツクリ函』『アンポンタン』『絵本太閤記』ほか。

松山文雄

まつやま

一九〇二一八二明三五～昭五七 漫画家、童画家。

長野県大門町に生まれる。上京後は前衛

画家グループに参加していいたが、一九二六年柳瀬正夢

らの日本漫画家連盟の書記をしつつ政治漫画に転じ

る。岡本帰一に童画を師事し、「コドモノクニ」などに

童画を描く一方で、プロレタリア美術運動の漫画分野

を担つた。三年満州事変直前に刊行したガリ版解説

入り漫画集『ハンセンエホン・誰のために』は即日発

売禁止。治安維持法によつて検挙され、出獄後女流画

家前島ともと結婚、政治漫画の執筆は禁じられ、小県

大門名で獄中体験漫画などを「東京パック」に描く。

壺井栄の処女出版『暦』の装丁、また川崎大治、横本

楠郎たちの童話集の装丁挿絵などを描いた。戦後は「赤

旗」に政治漫画で登場し、この仕事は死の直前まで続

く。四六年に安泰、村山知義らと日本童画会を結成、

毎年童画展を開催する。また日本アンデパンダン展な

どにタブロー漫画、童画を出品した。入門書に『新し

い漫画・童画・版画の描き方』（一九四八）、研究書に岡本唐貴との共著『日本プロレタリア美術史』（六七）、漫画集に『漫画で見る戦後史』（六七）、絵本に斎藤隆介『まけうさぎ』（七二）など多数。『画集まつやまふみおの世界』で八〇年日本漫画家協会特別賞を受賞した。

（石子 順）

マトウーテ アナ マリア Ana Maria Matute 一

九二六一 スペインの作家、児童文学作家。バルセロナに生まれ、大学を出た後二歳のころから小説を書きはじめたが、その後児童文学にも強い関心を示すようになり、『きんいろ日のバッタ』（一九六〇）、『気まぐれ小馬』（六三）、『ユリシーズ号の密航者』（六五）といった作品は、繊細な子どもの心から生まれる空想を、スペイン児童文学の伝統と風土の上に生かしたものとして注目されている。

（安藤美紀夫）

間所ひさこ まとうひさこ 一九三八一（昭13）詩人、

（

童話作家。本名石川壽子。東京都滝野川区（現北区）生まれ。一九五六年都立墨田川高校卒業。五一年日本童話

会に入会、詩と創作を学ぶ。六五年第一回日本童話会

賞受賞。作品には第一回野間児童文芸賞推奨を受け

た詩集『山が近い日』（一九七四）、小さな心のうずき、

迷いそして喜びを描いた童話『リコはおかあさん』（六

九）、絵本『うさぎのみみこ』シリーズほか、同『トツ

チくんのカレーようび』（六九）など多数。

（早川史香）

まどみちお 一九〇九（明42）詩人。本名

いている。

【参考文献】阪田寛夫『まどさん』（一九八五 新潮社）

（吉田定二）

石田道雄。山口県徳山に生まれる。小学四年生の春、台湾に渡る。台北工業学校土木科卒業。台湾總督府に勤務のかたわら詩作。一九三四年店頭で「*コドモノクニ*」を知り、童謡五編を試作投稿する。うち二編が北原白秋の選により特選の一・二位に推される。「文芸台灣」「動物文学」「童魚」、また水上不二らと「昆虫列車」（一九三七）を創刊し作品を発表する。四三年、船舶工兵として応召。シンガポールで敗戦を迎える年、「戦中日誌」を携えて復員、上京。四八年から約一〇年間、幼児雑誌の編集に従事。その後執筆生活に入る。六八年に第一詩集『てんぶらびりぴり』を出版、野間児童文芸賞を受ける。五九歳での処女詩集であつたが、それまでに戦後童謡の代表作ともいえる『ぞうさん』をはじめとする数多くの童謡を生み、多くの子どもたちに歌われている。人間性の根元から生み出された童謡は、感嘆とユーモアが交じり合い、戦後の幼児童謡がこの詩人によつて確立されたとさえいえる。童謡集に『ぞうさん』（六三）ほか、作曲者との共著曲集が数冊ある。第二詩集『まめつぶうた』（七二）で、永遠のぞく目（思念）をもつて原初（宇宙）への郷愁感に満ちた新しい詩の境地を開く。詩集にはほかに『まど・みちお詩集』全六卷（七五）、『風景詩集』（七九）、『いいけしき』（八一）、『しゃつくりうた』（八五）があり、多くの受賞に輝

六一 ニュージーランドの女流児童文学作家。『魔法使いのチョコレートケーキ』（一九七二）、『海賊の大バーティ』（七八）などストーリーテリングの素材にふさわしい短編作家としてスタートした。初の長編『The Haunting 幽霊つき』（八二）と次作『The Changeling 転換』（八四）で連続カーネギー賞受賞。その後も毎年高等学校対象の力作を生み出す。子どもの内奥に身近な大人の影が映る時に生じる超自然的な現象を、ユーモアとリズムにあふれた文章でつづる。

馬渕冷佑 まぶゆう 一八七九—一九四一（明12—昭16）

国語教育者、童話作家。岐阜県に生まれる。青山師範専攻科卒。東京府立女子師範附属小学校を経て東京高師附属小学校訓導。国定国語読本（一九三三年度より使用）編纂委員を務め、教師用解説書の著者として活躍。同職の山崎光子とともに『お伽文学』一二冊を共著し、童話作家協会会員。森鷗外、鈴木三重吉、松村武雄とともに『標準日本お伽文庫』全六冊（一九二〇）を完成させた業績は大きい。童話『夜叉が池』『蠅』などがある。

（滑川道夫）  
馬海松 マヒソン 一九〇五—六六 韓国の童

話作家。京畿道開成に生まれる。日本大学芸術学部卒業後、吳相淳・洪蘭坡らと、開化運動に力を注ぐ。一九二四年少年運動と児童文学運動の研究同人である「セクション会」同人になる。五四年有志と「韓國児童文学会」創設。五七年「韓國児童憲章」起草。代表作に『兎とさる』(一九四七)、『花のたねと雪だるま』(六〇)、『馬海松児童文学読本』(六二)がある。自由文学賞、韓国文学賞を受ける。

(韓丘庸)

魔法 まほう マジック。古代より各種民族に存在した魔法は、さまざまなかかわっていた。フレーザーは「魔法は人間どと深くかかわっていた。魔法は人間が自然界の諸力を直接統御する技術」といい、ダイアン・フォーチュンは「思つままに意識の中に変革を惹き起す技術」といつている。魔法を使う者は自己の肉体的感覚を凝縮させ、目に見えぬ世界の層をいくつも通り抜け、万物に内在する原動力を把握し駆使しなければならない。道具として剣・杖・五芒星形・盃・小槌・円陣・三角型・印象衣装・香料・呪文・意味不明のことば(アブラカダabraなど)が用いられる。魔法の象徴である杖の一振りで、現実では実現不可能な願望がかなえられたり、空を飛び未来や過去へ入るという現実の制約から自由となり、意外な変化と多様性を物語の世界に与えている。こうした段階の魔法・呪術は、本来の体系性を失い呪法、まじないといわれ、人間の

幸・不幸・損得などは、精靈・邪靈の仕業とし、精靈を呼び出して約束させ、強引にその願望を代行させる技術となっている。日本では雨ごいから病氣退散までを精靈を呼び出して行わせる巫女・祈禱師、西洋ではシェークスピアの『嵐』で空氣の精エアリエルを使魔として支配する魔術師プロスペロなどがこれに相当する。アーサー王伝説のマーリンは、人間の女性と同衾した夢魔の子であるため妖術師または妖魔ともいわれるが、英雄の運命を予言しその糸を繰り、变身の術をもつ魔法使いの典型として、トールキンの『指輪物語』の魔法使い Gandalf まで系統をたどれる。貧しい老夫婦に親指トムを授けたのも、旅姿の僧侶に変じたマーリンである。『白魔』(ホワイトジン)を使うものに対し、悪魔の契約に署名しあるいは魂を売り、悪魔・悪鬼を呼び出し支配する『黒魔』(ブラックジン)の使い手は、妖術師と呼ばれる。世界で最も力のあつた三人の魔法使いは、ドイツのバンダー・マスターと、イギリスのフライアード・バンゲイとフライアード・ベイコンで、巨竜やペルセウスの精靈を呼び起こして術比べをし、魔法の円陣が破れて死んだ。

(井村君江)  
継子話 （ままこ） 繙母による継子いじめをモチーフとする民間説話の総称。筋はおおむね、母を失った子に継母が迎えられ、継子と継母に葛藤が起こりへ起く、継子が難儀に遭いへ承く、援助者の助力によつてへ転く、

幸福になる「結」と展開する。世界的に分布し、成立に社会の家族関係と民族の宗教や神仏観念を反映する。日本では、昔話「米福栗福」「姥皮」が、縁起、お伽草紙の説話では「鉢かつき」「二所権現事」「中将姫本地」など数多く採録され、草子や昔話のほかに説教、淨瑠璃、口説、絵説などを通して庶民に伝播した。継母子葛藤の次に用意されている継子の遭遇するでき事のモチーフに成長儀礼の擬死再生を他界訪問としてとり入れ、試練克服に祖神の援助を受け、生まれ清まって幸せになるという構造を備える。児童文化としては成長課題の解決のため、心理的にはどの子どもにも機能し、実生活で継母子関係の中にある子どもには直接的働きをもつ主題である。

(斎藤寿始子)

## マヤコフスキー ウラジーミル・B

Владимир

Владимирович Маяковский

一八九三—一九三〇 ソ

ビエトの詩人。グルジア共和国に生まれた。『ズボンをはいた雲』(一九一五)などの革命的な詩で知られる前衛詩人。児童文学の分野でも大きな足跡を残し後世に影響を与えた。幼年向きの詩に『いいってどんなこと、わるいってどんなこと』(一九五)、『*Кем быть?*』なにになるの?』(一九)などがあり、新しい社会を担う幼い子どもたちに市民の自覚を情熱をもつて示した。

(松谷さやか)

眉村 卓 まゆむら 一九三四一 (昭91) 小説家。

本名村上卓児。大阪市に生まれた。父は実業家で歌人。大阪大学経済学部で予算統制を専攻、柔道部員三段。卒業後、煉瓦会社に勤め工場の庶務、販売課。アルフレッド・ペスターの『虎よ虎よ』でSFの世界に触れ、SF同人誌「宇宙塵」に参加。一九六二年、「SFマガジン」第一回コンテストで小松左京、豊田有恒らと並んで入選、佳作第二位。広告会社大広のコピーライターを経て、社会派SF作家。第一短編集『準B級市民』以来、生活の哀感のある作風で読者を増やしている。ジュニアSF『なぞの転校生』(六七)、『まぼろしのペンフレンド』(七〇)、SF童話『ぼくらのロボット物語』(八四)ほか児童向け作品にも社会派の面目があり、優れた児童文学である。光瀬龍、内田庶らと少年文芸作家クラブにも所属。

マリイエラ Iela Mari 生年不詳 イタリアのデザイナー、絵本作家。代表作『あかいふうせん』(一九六七)『木のうた』(七五)。前者は朱色と黒い線のデザインによる方型の絵本、赤い風船がリング、蝶、花、傘と形をえていく感覚的な美しさ。後者は一本の樹木の四季の変化を精細な筆致で描く。この絵本の原書はリングでじ、けものの追いかけっこを描く『Mangia che ti mangio おまえを食べるエンドレス絵本』。その他、夫と共に終幕がはじめに戻るエンドレス絵本。

ある。

(森久保仙太郎)

マリヤット フレデリック Frederick Marryat 七九一～一八四八 イギリスの作家。早くに海軍に入り数々の功績をあげたのち、執筆活動に専念する。『Peter Simple』ピーターリンプル(一八三四)、『Midshipman Easy』イージー候補生(三六)など、実体験に即した最初の冒險小説作家として知られる。『ロビンソン・クルーソー』(一七一九)に影響を受けた『Masterman Ready』老水夫マスター・マン・レディ(一八四二)は有名。ほかに歴史小説『ニューヨークの子どもたち』(四七)などがある。

(定松 正)

丸岡秀子 まるおか 一九〇三～(明36～) 評論家。長野県南佐久郡生まれ。奈良女高師卒業。戦前より婦人の地位向上に努力。戦後PTAおよび教育改革運動にも参加し『日本農村婦人問題』(一九三七)、『女の一生』(五三)、『母親入門』(六〇)、『丸岡秀子評論集』全

一〇巻(七八)ほか多くの著書を出版するなど、運動に指導的足跡を残す。少女層にも読めるようとの配慮をもつて書かれた自伝的小説『ひとすじの道』全三巻(七八)は、女性の眞の自立を描いた作品として、広く読み継がれている。

丸木 俊 まるき 一九一二～(明45～) 画家。旧姓赤松。北海道生まれ。女子美術専門学校卒業後小学校代用教員となる。熊谷守一に師事。外交官家庭教師

として一度モスクワ滞在後一九四一年日本画家丸木位里と結婚。四五年原爆投下数日後に位里の郷里広島を訪れ惨状を見る。五〇年夫婦合作で「原爆の図」第一部「幽霊」、八二年までに一五部を発表。後期はモチーフが被害から加害に変わる。五二年世界平和文化賞。原爆を離れた反戦画も描き「三国同盟から三里塚まで」で七九年反ファシストトリエンナーレ国際具象画展大賞。強さに兼ね備えた優しさによって第二次大戦中より童画を描き、童画家・絵本作家としても著名。戦後には、松谷みよ子文『日本の伝説』(一九七一)国際童画ビエンナーレ・ゴールデンアップル賞など絵本数十点。『ひろしまのピカ』(八〇)では文も書き、子どもに反核を訴え、絵本につばん大賞。九ヵ国で翻訳出版。ほかに受賞作多数。自伝に『女絵かきの誕生』(七七)など。

(宇佐美承)

マルシャーク サムイル・ヤ カムイル・ヤコブovich Marshak 一八八七～一九六四 ソビエトの詩人、児童文学学者。ソビエト児童文学創始者の一人。ロシア南部のヴォローネジ市に生まれる。父は化学技師であったが、ユダヤ人のため、一家の生活はつらかった。居住地、教育などで差別を受けた。中学生の時、その詩才を認めていたゴーリキーのヤルタの家で暮らすことになる。一九一二年イギリスに留学、ロンドン大学で学ぶ。一七年、革命後生まれた新しい国、ソビエトに帰

り、「子どもの町」づくり、子ども劇場の仕事に挺身した。ゴーリキーに勵まされ、児童詩、童話、児童劇も書く。第二次世界大戦中、日本でも人気のある児童劇となつてはいる幻想的なお伽劇『森は生きている』(一九四三)を書いた。戦後もソビエト文学界の中心的存在として活躍。ソビエトの子どもはマルシャークのお話で育つといわれてはいるが、その作品は広く世界の子どもたちに愛されている。日本でも『森は生きている』のほか『どうぶつのこどもたち』(二三)、『とんまなおじさん』(三三)、『しずかなおはなし』(五八)、『魔法の品売ります』(六四)、自伝小説『人生のはじめ』(六二)など多くの作品が翻訳、出版されている。ソビエトの激動の時代を生きたが、どんな時にも芸術的誠実を犠牲にすることなく、よい仕事を残した。

(北畠静子)

(一一)、鹿島鳴秋『お伽図書館』(一一)、絵入り叢書『オナシ』全五冊(一二)などのほか、合併後も『未明童話集』全五冊(二七・三二)、武井武雄『おもちや箱』(二七)、久保田万太郎訳の『小公主』(二七)、それに童話作家協会編の『日本童話選集』全六冊(二六・三一)などがあり、この面での出版も忘れられない。(関口安義)

**マルタン・デュ・ガール** Roger Martin du Gard 一八八一—一九五八 フランスの小説家。

丸 善 (せん) 東京日本橋の書籍、文具、事務機器、洋品雜貨販売の店(現存)。一八六九年(明2)、福澤諭吉門下の早矢仕有的を中心同志が集まり、洋書輸入を主体事業とした丸屋商社を横浜に創設したのはじまる。一方、八一年、早矢仕は個人で神田に中西屋書店を開店、和洋書販売と出版を行っていたが、一九二〇年に丸善と合併した。丸善は外国書籍の輸入、『百科全書』の刊行など近代日本文化への功績が大きい。なお、児童図書関係には、中西屋時代の巣谷小波『日本一の画嘶』全三五冊(一九一一・一五)、同『子供四十八景』

(三七)。

**丸山 薫** (まるやまと) 一八九九—一九七四(明32—昭49) 詩人。大分市の生まれ。第三高等学校を経て、東京大

(牧野文子)

学国文科卒業。三高時代に三好達治らと親交、詩作に励み百田宗治の「椎の木」同人となり詩集『帆・ランプ・鷗』を処女出版、凝縮された詩型によつて昭和の抒情詩の可能性を示した。一九三四(昭9)堀辰雄らと詩誌『四季』を創刊し詩集の刊行も相ついだ。戦時中から児童文学のペンを執り童話集『ヤシノミノタビ』(一九四二)、少年詩集『つよい日本』(四四)を出したが、

戦災を受けて山形県に疎開し、岩見沢小学校で教鞭を

執りながら書いた少年少女詩集『青い黒板』(四八)は、

山村の子どもの生活をのびのびと歌いあげて、少年詩の世界に新生面を拓いた。ほかに児童のための『新しい詩の本』(五二)があり、晩年にも詩集『月渡る』(七二)などがあつて詩一筋の充実ぶりをうかがわせる。その後に角川書店より『丸山蕙全集』全五巻(七六~七七)が刊行された。

丸山林平

(まるやま  
りんぺい)

一八九一~一九七四(明24~昭49)

(稗田董平)

国語教育者、文学研究家。新潟県中魚沼郡下条村の生まれ。高田師範を経て、東京高師文科、東京文理科大学国語国文科卒業。東京高師附属小学校教師時代に、国語教育の各方面と児童文学との接点を求めて、『国語教育と児童文学』(一九二五)を著したが、これは読み、書き、聴き、話すという国語教育の四領域に児童文学をいかに取り入れ、交渉させるかに思いをめぐらした労作で、今なお評価に堪えるものがある。丸山はその

後一九三〇年代に中国東北部(満州)の長春(新京)にあつた建國大学で約七年間、中国人、蒙古人、ロシア人学生に日本語および日本文学の指導に当たり、第二次大戦中に帰国。戦後は静岡英和短大教授となり、古典研究・国語学研究に励んだ。ほかの著書に『読方教育大系』(二六)、『定本古事記校注』(六九)などがある。『国語教育と児童文学』は八七年に復刻版が出ている。

(関口安義)

マレルバ ルイージ Luigi Malerba 一九二七~

イタリアの作家。パルマに生まれ、一九五〇年にローマに出てからは、映画のシナリオ作家として活躍し、『Il serpente 蛇』(一九六五)で作家としてデビューした。そのユニークな風刺的な作風は、児童文学とも共通するものがあり、その『Mazziconi おんばろぼろさん』(七五)や、短編集『スーパーでかぶた』(八四)などは、児童文学のシリーズの一冊に加えられている。

(安藤美紀夫)

マロ エクトール・アンリ Hector-Henri Malot

一八三〇~一九〇七 フランスの小説家、批評家。ラ・ブイユで公証人の息子として生まれ、法律の勉強をした後、文学の道に入る。新聞や雑誌に投稿し、やがて『国民公論』誌の文芸批評を担当する。批評家として出発したが一八五九~六六年には三部作の連作小説『Les victimes d'amour 愛の犠牲者』を発表、以後七

○編あまりの作品を書いた。文学的自叙伝に『Le roman de mes romans 私の小説の物語』(一八九六)

がある。六九年に子ども向けの本として『ロマン・カルブリス』を刊行した。孤児ロマンが虐待され伯父のもとを逃げ出し、サーカスの一座に入り、苦労の末幸福になるという筋立てで、当時比較的多く出ていた少年の旅物語の流れをくむものと考えられる。同年一月、『教育と娯楽の雑誌』の編集をしていたエツツェルがマロにあてた手紙で「フランス中を旅してまわる少年の物語」を依頼、これにこたえる形で書かれたのが二巻の長編『家なき子』(七八)である。捨て子の少年が結局は幸福になるという筋立てはありきたりだが、少年の心情がよく描かれており、フランス・アカデミー賞を受賞した。フランス本国では広く読まれ、近年も多少の省略をしたりしながらいくつもの版が出ている。もともと社会科・理科的知識を与えるという教育意識があつたためか、部分的に教科書版もつくられた。その後やはり孤児の少女を主人公とした『家なき娘』(九三)を刊行、母を亡くし祖父の工場で勤めはじめた少女が、やがて孫娘として認められる物語である。このようないくつかの少年少女向け作品では、主人公が困難を乗り越えて成長し家庭的な幸福を得るという枠組みがみられる。それでも長く本国や日本で読み継がれてきたのは、描写が綿密であることに加え、期待を裏切らぬ

ハッピー・エンドによる満足感が読者に求められてきたためだろう。

「家なき子」きなこ

*Sans Famille*

長編小説。一八七八年刊。捨て子の少年レミが旅芸人の一座に入り、親方の死後、花づくり農家に身を寄せたり、友人と旅回りを続けたりするうちに実母と再会し、イギリスの貴族の当主となり幸福な家庭を築く過程が、一人称の回想形式で描かれる。母親搜しへの共感、旅による少年の成長への感動がある。日本では明治末に五来素川により紹介され、菊池幽芳により訳題が定着。以後数多くの再話により今日まで広く親しまれてきた。(佐藤宗子)

マン　トーマス Thomas Mann 一八七五—一九五五年ドイツの代表的作家、評論家。作家ハインリヒ・マンの弟。北のリューベックに商人の息子として生まれるが、父の歿後家業は衰退、移住先のミュンヘンで保険会社の見習い社員となる。一八九四年退職、処女作『転落』(一八九四)がデーメルに認められたのをきっかけに作家の道を歩み出す。早くから自己体験に根ざす、市民社会に生きる芸術家の苦悩をテーマにし、内的調和を求めて終生、生の世界と精神の世界、市民と芸術家の対立を描き続けた。末裔が芸術的になつていくにつれ没落する商家の歴史を描いた自伝的長編小説『ブッデンブローク家の人々』(一九〇一)で作家として確固とした地位を築く。自己を投影した一四歳の芸

藝術家氣質の少年トニオの苦惱を描いた短編『トニオ・クレーデル』(○三)は、藝術家の宿命を語った名作。ナチス政権下に国外に亡命。一九二九年ノーベル文学賞受賞。ほかに『魔の山』(一四)などの長編を数々残した。

(川西美沙)

**漫 画** (まんが) 美術の一分野であり視覚文化である。一コマ漫画を舞台にして四コマ、八コマから数百コマ以上のストーリー漫画まで分かれて発展してきた。今の子どもたちの間で漫画といえば、雑誌連載あるいは単行本となつたストーリー漫画を指している。一コマ漫画の歴史は長く、一七世紀のヨーロッパにおいて風刺画から独立していく。民衆が権力者を風刺と誇張によってカリカチュア化し笑いとばす芸術として、複製可能な印刷技術の発達によつて広がつた。日本では、明治期に入つてヨーロッパからきた漫画と、浮世絵などの民衆画とが結びついて近代的な漫画が生まれる。

物語性をもつた子ども漫画は一九世紀半ばのドイツにみられ、世紀末のアメリカ新聞に人気漫画として現れる。日本においては、大正期の『正チヤンの冒險』が『朝日新聞』『アサヒグラフ』に載り、早い登場で、昭和に入ると、『のらくろ』『等卒』など多くの作品によって定着する。映画的手法を取り入れたストーリー漫画は日本独自の形態の漫画として戦後手塚治虫によつて盛んになり、ここから少年漫画、少女漫

画と分かれていく。さらに青年漫画、劇画という形も現れて一コマ漫画は色あせたかにもみえた。しかし、政治、生活、風俗、似顔といったさまざまな一コマ漫画は、新聞に雑誌に展覧会にとなお根強い存在となつてゐる。漫画雑誌は各種一三〇誌以上、年間刊行の漫

画単行本、雑誌はおよそ一二億冊以上。子どもの学習漫画から大人の経済、情報、教養面の漫画まで拡大している。そうした中で子どもの文化団体、読書運動各分野においても漫画に対する研究が高まつてきてゐる。一九八六年には全国学校図書館協議会も漫画選定基準第一次案を発表した。なお漫画団体として日本漫画家協会があり、会員四〇〇名以上を擁してゐる。

**【参考文献】** 石子順『日本漫画史』(一九七八 社会思想社教養文庫)、子どもの文化研究所編『子どもの漫画100の世界』(一九八七 棚の木社)

(石子 順)

**漫 画 少 年** (まんがしょ)

\* 加藤謙一の興した学童社より刊

行された、戦後の代表的な少年漫画専門誌。創刊は一九四七年(昭22)二二月、廃刊は五五年(昭30)一〇月。山川惣治、田河水泡、井上一雄、沢井一三郎など、戦前の『少年俱楽部』に描いた漫画家、絵物語作家に加え、手塚治虫、石森章太郎などの新進の漫画家に発表の場を与えて、子どもを善導する内容の作品を数多く掲載した。手塚の『ジャングル大帝』、井上一雄の『バットくん』はその好見本とみていい。しかしその良心的な

内容のために、「おもしろブック」「冒險王」「少年画報」などの活劇を主体とした少年誌におされ、部数が伸びずに終刊した。また、作品の掲載に加え、新人の投稿欄を常設して、新人の发掘に力を入れた。戦後の児童漫画の発展を担つた寺田ヒロオ、石森章太郎、藤子不二雄、赤塚不二夫、角田次郎、関屋ひさしらが、ここから育つた。名実ともに、戦後の児童漫画の発展の基軸となつた、漫画少年のための雑誌である。(竹内オサム)

マンツイ アルベルト Alberto Manzi 一九二四イタリアの児童文学作家。さまざまな雑誌や児童文学叢書の編集に携わりながら、自らも児童文学作品や子どものための知識の本を書いた。代表作に『ビーバーの冒險』(一九五〇)や『密林の少年』(五五)などがあり、前者はコッローディ賞を、後者はフイレンツエ賞と国際アンデルセン賞優良賞の二つの賞を得た。また知識の本としては『Vogliamo conoscere』知りたいと思いませんか』(六一)のシリーズがある。

(安藤美紀夫)

## ミ

## 三浦哲郎

てみうら

一九三一～(昭6～) 小説家。

青森県八戸市に生まれる。早稲田大学仏文科卒業。『十五歳の周囲』で第二回新潮同人雑誌賞(一九五五)、『忍ぶ川』で第四回芥川賞(六一)、「拳銃と十五の短篇」で第二回野間文芸賞を受賞。小説のほか、少年小説『燃ゆる瞳』(六五)、少女小説『ひとり生きる麻子』(六六)、長編童話『ユタとふしぎな仲間たち』(七二)がある。また、掌編小説『笛舟日記』(七五)の中の作品は中學・高校の国語教科書にたびたび採用されている。

(北 彰介)

## 三枝ますみ

みえだ

一九二八～(昭3～) 童謡詩

人。本名長島益江。埼玉県坂戸市に生まれる。一九六〇年中山晋平音楽賞一位。六二年より宮澤章二主宰の「むぎばたけ」同人、その後、武鹿悦子、神沢利子、稗田宰子らの「鶯鳥の会」に参加、阪田寛夫、関根栄一、鶴見正夫らの「6の会」とともに、新しい子ども